

## FIAFオスロ会議報告

A Report on the 66<sup>th</sup> FIAF Congress in Oslo

## JTS2010におけるデジタル保存・管理の新提案

板倉 史明

Fumiaki Itakura

連載:

フィルム・アーカイブ  
の諸問題  
第74回

4月30日から5月8日までの9日間、国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の年次会議が、ノルウェーの首都オスロで開催された。ここでは、今回の会議について、シンポジウムでの議論を中心に、その概要を報告する。

今回行われた第66回FIAFオスロ会議は、ノルウェー国立図書館とノルウェー映画協会がホスト機関となって開催され、総計300人近い参加者が世界中から集まり、盛況のうちに幕を閉じた。毎年会期中に特定のテーマを設定してシンポジウムを実施しているが、今年はFIAFとCCAAA(視聴覚アーカイブ団体連絡協議会)との共催によって、視聴覚メディアの保存・復元に関する最新の技術的研究成果を発表する、第8回目の「ジョイント・テクニカル・シンポジウム(JTS2010)」が、その役割を担った。5月2日から4日までの3日間にわたり、「視聴覚アーカイビングにおけるデジタルの挑戦と好機」というテーマの下、世界各国のアーキビスト・研究者・技術者などによる30以上の研究発表が行われた<sup>1)</sup>(会場は市中心部にある映画館クリンゲンバーク・シネマ)。以下、本稿では、JTS2010における研究発表のいくつかを紹介しながら、FIAFオスロ会議の報告を行いたい。

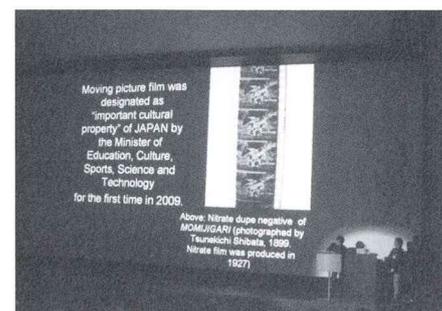
JTSのプログラム委員には、FIAFの他、AMIA(映像アーキビスト協会)、ARSC(録音資料コレクション協会)、FIAT(国際テレビアーカイブ連盟)、IASA(国際サウンドアーカイブ協会)、IFLA(国際図書館連盟)、SEAPAVAA(東南アジア太平洋地域視聴覚アーカイブ協会)に所属するメンバーが名を連ねていることから、JTSが、映画に限らず、より幅広い視野から映像と音声のアーカイビングについて議論

する場であることがわかるだろう。3年前のJTSのテーマが「視聴覚遺産とデジタルユニバース」であり、今回が「デジタルの挑戦と好機」であることから明らかなように、世界中の視聴覚アーキビストたちが直面しているのは、やはりデジタル技術といかにうまく付き合っていくのか、という問題である。今回のJTSで行われた発表の多くは、デジタル・データの保存・管理・公開等の問題を扱った発表であった。正直なところ、筆者が、デジタル技術の専門用語が飛び交う本シンポジウムのすべての発表を十全に理解することができたとはいえない。しかし、フィルム・アーカイブを取り巻いている、視聴覚遺産の保存・管理の“いま”を把握するには格好の機会であった。以下、フィルム・アーカイブの未来に密接にかかわるとされる発表をいくつかピックアップして、簡潔に概要を紹介したい。

映像の長期的な保存・管理の問題としては、パーゼル大学イメージング&メディアラボのペーター・フォルナロ氏による「モリス——マイグレーション不要の長期デジタル保存:視聴覚アーカイブにおける技術的陳腐化に打ち勝つ方法」が出色であった。これは、画像やそれに関連するドキュメントやメタデータにいたるまで、すべてスキャナーでデータ化して、一本の35mmフィルムにレコーディングして長期保存する方法である。“Bits-on-Film”(フィルムにビットを記録する)という用語で紹介されたこの方法は、最終的な長期保存媒体としてフィルムを用いる点において、現在のフィルム・アーカイブの考え方と親和性のある発表であった(この発表については、JTS2010に参加された大関勝久氏による「デジタル時代のフィルムアーカイブ」[『映画テレビ技術』2010年11月号]に詳しい)。そのほかにも、サザンプトン大学のマシュー・アデイス氏による「大規模な視聴覚アーカイブのための長期データ・インテグリティ」の発表は、デジタル・データを長期保管してゆくための具体的な提案に充ちていて啓蒙的であった(詳細は、本誌92号における岡島尚志の「デジタル・コンテンツの長期保存——問題の整理と更新に向けて」を参照されたい)。

音素材のデータ化については、録音資料コレクション協会の技術委員でもあるインディアナ大学のマイク・ケーシー氏の発表が刺激的であった(「スケーリング・アップ:音声保存の

効率を増大させるための、リサーチ・アーカイブにおける並行移植の使用)。大学内などに設置されているリサーチ・アーカイブでは、資料の長期保存とともに、研究者からのアクセスに迅速に応える必要がある。ケーシー氏が所属する大学の伝統音楽素材を、現状の設備ですべてデジタル化しようとする、60年もかかってしまうという。これでは、デジタル化が完了する60年後には、採用したデジタル形式はすでに陳腐化し、さらに磁気テープ等の素材の劣化がさらに進行していることは明らかである。そうだとすると、求められるのは、エラーの少ないスピーディーな自動デジタル化技術である。ケーシー氏が主導しているサウンド・ディレクション・プロジェクトでは、1本の音素材に対して同時に複数のデジタル化を施したうえで、それら複数のデジタル・データに違いがあれば(すなわちデジタル化する際のエラーがあれば)それを自動検知するシステムを考案している。それを使えば、上記コレクションのデジタル化を60年から15-20年くらいにまで短縮できるという。もちろんこの方法は長期的なデジタル・データ保存の問題を解決してくれるものではなく、あくまでアクセス可能なデジタル・データを効率的に生産するという、リサーチ・アーカイブ特有の現実的な側面に道筋を与える発表であった。しかし発表内容は、なにも音資料だけに限定されるものではなく、映画をはじめとした映像アーカイブにとっても示唆的な発表だったといえる。そのほか、音関連の発表として特記すべきは、「映画の光学サウンドトラックのためのスキャン技術」と題するパネル・ディスカッションであろう。これは、サウンドトラック自体をスキャナーで画像データとして取り込んだうえで、音の修復を行う技術についての、最新の成果発表であった。デジタル的なノイズリダク



シンポジウムで発表する清野晶宏氏(株式会社IMAGICA)、大関勝久氏(富士フィルム株式会社)と筆者(写真提供:呉聖智[オ・ソッチ、韓国映像資料院])



学会の会場となったノルウェー映画協会の建物正面 (FIAF オスロ会議公式ホームページより転載)

ションのクオリティは、いかにより良い素材(音ネガや上映用プリントのサウンドトラック)から、よい音を抜き出すことができるか、という点にかかっている。だとすれば、より良い音を抜くためには、サウンドトラックを画像データ化して、サウンドトラックについてのキズや汚れ等をデジタル的に修復して取り除けばいいわけだ(さらにこの技術を使えば、音ネガから直接スキャンして修復・音抜きすることができるという)。おそらく日本の現像所ではまだ実用化されていない技術であるが、この技術はフィルム・アーカイブにとってだけでなく、旧作のフィルム復元やDVD化を行う映画会社にとっても、将来的な可能性を秘めた技術ではないだろうか。

そのほかにも、1878年にエジソンがはじめて発明した蓄音機(tinfoil phonograph: 錫箔をシリンダーに巻き付ける方法)の、現存する錫箔(1879年録音)に対して、光学的なセンサーを使って音を抜き出し、デジタル的に音の修復を行った発表も、文化的観点から刺激を受けた(サザンプトン大学とノルウェー国立図書館との共同研究「ノルウェーにおけるはじめての録音素材の復元と同定」)。

専門的な技術的発表が相次ぐなかで、3日間のシンポジウムの最後を締めくくったのが、ハーゲフィルム財団(オランダ)のパオロ・ケルキ・ウザイ氏による「デジタル保存を教育すること」という発表であった。簡潔に彼の主張を以下まとめると……すでにさまざまな先駆的試みはあるにせよ、現状、映画・映像のデジタル保存・復元を教育する場やシステムが構築されているところはほとんどなく、体系的なデジタル保存の理論やマニュアルが流通しているわけではない。それらを実現するために重要なことは、映画・映像のデジタル保存や復元は、けっしてデジタルの知識だけで完結するもので

はなく、かならず素材としてのフィルムに関する知識・経験・技術を前提とするものである、というごく当たり前の事実である。したがって、映像のデジタル保存・復元の教育は、アナログとデジタルの双方に強いスタッフをバランスよく配置することが求められる。さらにウザイ氏は、映画・映像メディアを“文化遺産”というより広いパースペクティブのもとで考察するために、先行芸術(絵画、彫刻、建築など)との関連のなかで、映画・映像の保存や復元を教える必要がある、と強調した。

なお日本からは、筆者、清野晶宏氏、大関勝久氏(発表順)が、『『銀輪』(松本俊夫監督、1956年)のデジタル復元と保存』について、共同発表を行った(写真)。これは、フィルムセンターが2009年度に実施したデジタル復元の成果を紹介するものであり、同時に、日本で新たに開発されたデジタル・インターメディアイト専用の白黒フィルムの特性を解説するものであった。日本におけるフィルム保存と復元の最新の技術的成果を世界へ発信するよい機会となった。

JTS2010の終了も、FIAF会員による年次総会や、その他さまざまな会合が開催された。総会において、オランダのハーゲフィルム財団と、モンテネグロのモンテネグロ・フィルム・アーカイブが準会員として承認された。これにより、FIAFは78カ国から151の会員によって組織される機関となった(正会員:84、準会員:67)。

また、既に本誌前号で紹介したが、FIAFオスロ会議の会期中に、フィルムの保存活動に貢献した人物を表彰するFIAF賞が、岡島尚志会長から、ノルウェーの女優リブ・ウルマン氏に贈呈された。

また総会の前には会員組織による地域ごと

のリージョナル・ミーティングも行われた。フィルムセンターが属する東アジアのアーカイブの集合組織FIFA(ファーフア)と、先述したSEAPAVAAの会議が合同で行われ、フィルム保存に貢献した先人たちに聞き取り調査を行う「オーラルヒストリー・プロジェクト」の各国の現状報告をはじめ、さまざまな意見交換がなされた(会議中、FIFA加盟の各アーカイブが、近年復元をしたフィルムを集めて上映する「FIFA復元映画祭」の開催に関する刺激的なアイデアもだされた)。

そのほかのイベントとして、「オーセンティックな表象——現代の映画製作におけるアーカイバル・フィルム」と題されたパネルディスカッションも行われ、パネリストのひとりとしてフィルムセンター主幹(FIAF会長)の岡島尚志が登壇した。各アーカイブが所蔵する映像資料を映画製作者が複製利用する際の規定や基準等について、アーキビストと映像製作者の双方から活発な意見が述べられた。ディスカッションの合間には各アーカイブが所蔵する珍しいフッテージが上映され、フィルムセンターからは『明治二十八年の両国大相撲』(1900年)が、岡島の解説付きで上映された。

そのほか、「第2世紀フォーラム」では、「移行期におけるアーカイブ・アイデンティティを強化する」というテーマで議論がなされ、所蔵するフィルムを積極的に保護するために、収集方針(コレクション・ポリシー)を明確にすべきだという提案がなされたほか、FIAFの会員になるための会員資格やフィルム貸借の問題をめぐって、FIAF会員(非営利機関)と、非FIAF会員(映画会社が運営する企業アーカイブを含む)との立場の違いや協力に関する議論、さらに、2008年のFIAFパリ会議において採択された「フェア・ユース(公正な利用)とアクセスに関するFIAF宣言」をもっと社会的に普及・認知させる運動の推進、などについて議論された。

来年のFIAF第67回年次会議は、南アフリカの首都のひとつプレトリアにおいて、南アフリカ国立フィルム・ビデオ・サウンド・アーカイブス(NFVSA)をホスト機関として実施される予定である(FIAFサマースクールも、同じプレトリアにおいて、年次会議の直前に実施される)。シンポジウムは、アフリカ固有の視聴覚遺産をテーマにする計画。その後の年次会議は、中国の北京(2012年)、スペインのバルセロナ(2013年)で開催される見通しだ。■

(フィルムセンター研究員)

註

1 第1回(1983年)はストックホルム(スウェーデン)、第2回(1987年)はベルリン(ドイツ)、第3回(1990年)はオタワ(カナダ)、第4回(1995年)はロンドン(イギリス)、第5回(2000年)はパリ(フランス)、6回目(2004年)と7回目(2007年)は共にトロント(カナダ)で開催された。